

地方創生と伝統行事 ～土地の記憶を行動で共有する～

③「脚折雨乞」(後編)

上席専門職 平沼 浩

目次

- | | |
|---------|-------------|
| 1. はじめに | 4. 武蔵野三大湧水池 |
| 2. 復活 | 5. まとめ |
| 3. 水の神 | |

1. はじめに

前号(No.149)に続き、埼玉県鶴ヶ島市で4年に一度、8月初旬に行われる「脚折雨乞」を紹介したい。後編の主なキーワードは「復活」と「水の神」である。

繰り返しになるが、「脚折雨乞」の特徴は、焼けるような猛暑の中、昔ながらの手仕事により竹や麦藁等で製作した重量3トン・全長36メートルの巨大な龍神を降臨させ、神・仏・人の総力を結集するところである。天に挑むのでもなく屈するのでもなく、大きな自然の力と人の暮らしに折り合いをつけるように連帯した先人の知恵と逞しさを伝えている。

前号冒頭では、雨乞いのイメージを覆された印象と1つの意見を述べさせてもらった。

その印象とは、「雨乞い」というと、成す術

のない人の弱さを連想させるが、少なくともこの伝統行事には、人の弱さも惨めさも感じられないということである。

それは前号で紹介したとおり、クライマックスの龍神昇天場面に象徴される。約300人の男たちに担がれた龍神は、聖池である雷電池を渦巻くように時計回りに大旋回する。そして、総指揮者の号令一下、前年の麦の種蒔きに始まり、大勢の手を介して作られ、運ばれ、思いを込められた龍神の依代は一気に解体されて姿を消す。まるで天に見えない橋でも架けるような龍神昇天をもって、一連の行事は潔くサッと幕を閉じるのである。潔さはまだある。記録が残る限り雨乞執行年に重複執行は一度もないのである。

1つの意見とは、この行事を表面的にモニター・スペクタクルの奇祭と捉えるのは間違いということである。これは後編に譲ったテーマでもある。

後編では、脚折の雨乞いの復活経緯を考察するとともに、視野を面に拡大し、現在も日本列島にいる「水の神」を訪ねることで、脚折の龍神や龍蛇は特殊な存在ではないことを確認したい。



2. 復活

鶴ヶ島市教育委員会の資料『脚折の雨乞い』は、平成13（2001）年の巳年にまとめられた。過去と現在の「脚折の雨乞い」報告書である。

これによると、昭和39（1964）年辰年の雨乞いが、農家の降雨祈願としては「最後の雨乞い」と位置付けられている。そして、一旦途絶えた後、ある取組みをきっかけに、干支が一回りした昭和51（1976）年の辰年に、地域の伝統行事として復活を遂げた。

(1) 最後の雨乞い

終戦後の雨乞いは、昭和22（1947）年、同24（1949）年に執行されたが、以降は干天の陸稲被害に見舞われることがあっても長らく行われることはなかった。

昭和39（1964）年の雨乞いは、実に15年ぶりだった。すでに4年連続の干天により陸稲被害は年を追って深刻化していた。

この年の関東の水不足は深刻で、東京都心部は約1か月におよぶ歴史的な大渇水に見舞われた。当時の新聞には、「東京サバク」、「東京“水キキン”」の見出しが並び、断水で深夜にポリバケツを持って給水車を待つ行列の写真がみえる。飲食店・理髪店等の休業、公立中高のプールの利用禁止、給水車が間に合わず自衛隊が災害出動していた。農家ばかりでなく都心住民も水の有難味と水不足の苦労を味わっていた。

資料『脚折の雨乞い』に収録された聞き取り調査によると、昭和39（1964）年の雨乞いの振り返りでは、「最後だから」、「最後の本当の雨乞い」、「本気でやった最後」といった言葉が並び、終幕の諦観が滲んでいる。15年ぶりの雨乞いの背景には、ふるさとと農業を背負った当事者たちに、以降の執行は困難と思わせたほど、社会環境の変化は激しかったことを想像させる。

同年10月には東京オリンピックを控え、高

速道路、東京モノレール、東海道新幹線と、目に見える新しい象徴が続々と準備されていた。東京銀座のみゆき通りを歩く最新ファッションの若者達は「みゆき族」と呼ばれ、東京発の流行が次々と発信された。

当時の鶴ヶ島村も道路整備と区画整理事業による市街地化が進み、農村の人口構成も大きく変わり始めていた。



上：昭和20年代の雨乞い。

下：昭和39年の雨乞い。

平成28年夏季の市役所ホールの展示より。

(2) 「けやき会」大蛇を作る

復活のきっかけは、「けやき会」の大蛇製作だった。「けやき会」とは、脚折地区のシンボルである白鬚神社の檺に因んだ親睦会である。地元の方の話では、ごく私的な集まりだったそうだ。なお、資料『脚折の雨乞い』の聞き取り調査によると、この頃は、龍神・龍蛇ではなく、単に大蛇と呼ばれていたようだ。

昭和50（1975）年11月8日（土）、手に覚えのある古老達の指導を受けて大蛇が製作された。この時点で、「最後の雨乞い」から11年が

経過し、鶴ヶ島村は鶴ヶ島町になっていた。

「脚折雨乞行事保存会」の結成は、大蛇製作の翌日、11月9日（日）である。初代保存会会長には、自治会の区会長代表が就いた。保存会結成の早さは、「財産として伝承すべし」というコンセンサスと、本来農家の降雨祈願神事を都市化する環境下で再生させる構想が急速に出来上がったことを物語る。

その機運は、「けやき会」が大蛇製作に踏み出し、古老達に声をかけ、材料集めに奔走し始めたときから、徐々に高まっていたのだろう。懐かしい物や風景や人に出合うとき、忘れていた記憶や感情が一気に覚醒する経験は誰にでもある。「けやき会」が実証してみせた生々しい大蛇の存在感が、何より饒舌なプレゼン材料になったに違いない。

昭和50（1975）年は、文化財保護法の改正により新たに民俗芸能や祭礼も無形民俗文化財の指定対象となった年である。

(3) 復活

辰年の昭和51（1976）年8月8日（日）、雨乞いは12年ぶりに復活した。丁度、モントリオール五輪の開催年である。復活にあたって、修正された点と堅持した点を整理してみた。

【修正された点】	
ア. 位置づけ	
農家の降雨祈願	→ 都市化を踏まえた地域の伝統行事
イ. 目的	
水神等への祈願	→ 自然との共生
農家相互の連帯	→ 住民相互の親睦
ウ. 実施主体	
農家集団（元々の住民）	→ 保存会・自治会（現在の住民）
エ. 開催時期	
農家の協議次第	→ 夏季五輪年に固定
オ. 水神の依代と水神の呼び方	
大蛇（大蛇）	→ 龍蛇（龍神）

【堅持した点】

ア. 水神の依代の素材と製作方法

イ. 祈願形式の伝統

*ア、イの内容は前号で触れた。

ウ. 趣旨

切実な背景をもった「雨乞神事」であり、祝祭的「お祭り」とは一線を画す。

復活といっても全く同等のものが甦ったのではなく、都市化した地域の伝統行事へと大転換を図ったうえでの再生だった。

実施主体が保存会に移行し、開催時期を夏季五輪開催年の8月初旬に固定すれば、本来の降雨祈願の核心部分は、自ずと後退することになる。だからこそ、大蛇の呼称が龍蛇に変わろうとも、製作素材と製作方法は堅持され、祈願形式も細部まで堅持されたのだろう。

仮に降雨祈願の核心部分を、水の有難味と水の苦勞を知る者が、同輩とともに自然や神々を信頼し、その恵みに感謝して物を大切にした精神性だとすれば、相当部分は伝統行事の中に大切に保持されているように思う。

埼玉県中部の夏は、例年関東地方の最高気温を記録する猛暑である。体感する暑さと咽の渴きには江戸時代も現代も違いはない。伝統行事となった「脚折雨乞」は、江戸時代と同じ猛暑を逆に味方につけている。

(4) 継続

平成28（2016）年、直近開催の「脚折雨乞」は、復活から数えて11回目、41年目を迎えた。

昭和51（1976）年8月「脚折雨乞」は、鶴ヶ島町から無形文化財の指定を受けた。その後、平成9（1997）年に埼玉県から選択無形民俗文化財の指定を受け、平成17（2005）年には国から選択無形民俗文化財の指定を受けた。

現在、鶴ヶ島市のホームページのトップ画像は「脚折雨乞」であり、ゆるキャラは龍体の『つるゴン』である。いつしか、「脚折雨乞」

は、見守られる存在から、地域の看板を背負う存在になっている。

平成28（2016）年開催の本番数日前、雷電池公園で初期準備にあたる4人の保存会の方々の姿があった。休憩の車座の輪に入れてもらったときの印象的な言葉を紹介したい。筆者が投げかけたのは、素朴な問いである。

「皆さんはなぜ、休日・平日を返上して、この行事に取り組まれるのか」

質問が硬過ぎたのか、4人中2人から、『年金をもらっているから』、『毎日が休日だから』と、煙に巻く答えが返ってきた。もちろん、時間的余裕と伝統行事への取組みは直結しない。しかも、4人中1人は職場から駆けつけた若手だった。

ひと呼吸おいて、平野行男会長は、継承者の一人として静かに言葉を返してくれた。『先輩達への恩返しだと思っている。』

会長は16歳のときに昭和39（1964）年の雨乞いに参加していた。当時、最年少の参加者である。先人への「報恩」は、現在および次世代に向けてすることで果たされる。そうした確信が、世代間を繋ぐ要なのかもしれない。

車座の1人が続けた。『自分は30数年前にこの土地で暮らすようになり、世話になった。もちろん生まれ故郷はあるが、今はここが自分のふるさとだと思っている。』

Iターンでありながら伝統行事を支えていることに敬服した。そして本番当日、総指揮者の櫛を掛け、力いっぱい行事の士気を盛り上げる姿に再度敬服した。

車座のもう1人は、本番当日、指揮者の櫛を掛けていた。前週の白鬚神社で、龍蛇の骨格製作の先頭にいた人である。そして、車座の中で先輩達の話の黙って聞いていた若手は、本番当日、炎天下の沿道に立ち、見物人の通行整理に笑顔であたっていた。

3. 水の神

何事も点より面として存在する方が力強い。人も文化も同じである。そこで、一見断片的とも見える龍と蛇に関わる文化を訪ねることで、人と「水の神」との関係の面として捉えてみたい。そのことを通じて「脚折雨乞」は表面的なモンスター・スペクタクルの奇祭ではないことを確認したい。

まず、日本地図の中央を眺めると、長野県の諏訪湖から辰野町を経て天竜川が太平洋側の遠州灘に注ぐ。日本海側では、福井県の山岳部から九頭竜川。紀伊半島をみれば和歌山県に高野龍神国定公園がある。いずれも国土の正式名称である。龍や竜と名のつく山河、湖沼、寺院は多く、市町村名にも見られる。

蛇の方は、地理的用例は少ないが、『古事記』、『日本書紀』をはじめ、各地の伝承、神楽、能楽、歌舞伎等への登場例は少なくない。

(1) 瀬戸内の雨乞い竜

香川県三豊市仁尾町の「雨乞い竜」も巨大である。昭和14（1939）年を最後に一旦途絶えたが、昭和63（1988）年の瀬戸大橋開通を機に伝統行事『仁尾雨乞い竜』として50年ぶりに復活した。行事は毎年8月初旬行われている。下の写真は70年以上前のものだが、現代版の竜はさらに巨大化している。

仁尾町の雨乞い竜も、大きな自然の力と人の暮らしに折り合いをつけるように連帯した先人の知恵と逞しさを伝えている。



昭和14年の「仁尾雨乞い竜」。
瀬戸内海歴史民俗資料館の展示資料より。

(2) 蛇口

水道の「蛇口」の語源は、東京都水道歴史館の展示解説によると明治時代に命名された「蛇体鉄柱式共用栓」にあるそうだ。

江戸が東京に変貌する時代、共用井戸はポンプ式共用栓に変わった。その共用栓の出水口のデザインが龍だったことから、蛇体の名が用いられたという。その画像は同水道歴史館ホームページにも紹介されている。龍口からの水は、寺社の手水鉢の見慣れた光景である。

ちなみに、江戸東京博物館の展示解説によると、江戸城下は掘削方式で淡水を得るには40m掘る必要があったという。そこで幕府は、多摩や武蔵野から上水を引き、木製や石製の水道管を江戸城下の地下に埋設し、共用井戸で分配した。江戸城下の人々から感謝をされた武蔵野の水源については後述する。

(3) 明治初の貨幣に描かれた龍

明治3（1870）年、明治政府は紙幣に先駆け、金本位制の下で貨幣を製造し、翌年、これを発行した。その表側のデザインは龍だった。金貨だけでなく補助通貨の銀貨、銅貨のデザインも共通だった。一時期とはいえ、龍は日本の通貨の守護神だった。



旧20円金貨のレプリカ

(4) 蛇の目

円の同心円上に外環を描いた文様は、「蛇の目」と呼ばれる。蛇の目の傘は、北原白秋の有名な童謡『あめふり』にも登場する。

ㄱ あめあめふれふれ かあさんが

じゃのめで おむかえ うれしいな

蛇の目傘の用途は、雨傘に限らない。たとえば、高僧が表を行く際には、晴天でも大きな蛇の目傘が差掛けられる。また、歌舞伎の代表作『助六』では、破天荒な主人公の助六が、雨でもないのに蛇の目傘を使って男性的な踊りを披露する場面がある。そこには何かの意図があるはずである。

傘の他に、日本酒等の試飲に用いられるお猪口は、「蛇の目猪口」と呼ばれる。液体の色や透明度等を確認するために白地に紺色の輪が描かれている。大相撲では、勝負俵の外側の砂を「蛇の目の砂」と呼んでいる。

また、昭和初期、「蛇の目式」という国産初の家庭用縫製マシン（ミシン）を開発した会社は、蛇の目ミシン工業である。ホームページに紹介されている社名由来からは、国産メーカーとしての気概がうかがえる。



蛇の目猪口

助六と「蛇の目傘」。物語りは八岐大蛇退治と重なる。江戸東京博物館の展示より。

(5) ブッダのことは

インド哲学者の中村元の『ブッダのことは』は、仏教開祖ゴータマ・ブッダのことは詩句形式で集成した古代聖典の翻訳である。訳者解説は、漢語訳の諸聖典が原典としたサンスクリット語訳聖典のさらに前のパーリ文による原始仏教聖典最古の一つと紹介してい

る。紀元前4世紀頃、吟じたものだそうだ。

平たくいえば、古代の中国・インドも飛び越えて、ブッダが弟子達と過ごした頃に吟じた“うた”の現代語訳である。

全五章の第一章のタイトルは「蛇の章」であり、冒頭から「蛇」というタイトルのソロ曲が1番から17番まで続く。各句の終わりは必ず、『蛇が脱皮して古い皮を捨て去るようなものである。』と締めくくられる。苦悩からの解放を蛇の脱皮の比喻でまとめている。次のタイトルは「ダニア」。牛飼いのダニアとブッタによる雨乞いをめぐるデュエット曲である。ダニアとブッタはそれぞれ、『神よ、もしも雨を降らそうと望むなら、雨を降らせよ。』と吟じる。

仏陀の「陀」から「卩」を除くと、「它」になる。「它」はトグロ巻く蛇の象形文字である。

(6) 法隆寺五重塔の蛇

奈良県生駒郡斑鳩町いかるがちょうにはユネスコ世界文化遺産の法隆寺がある。五重塔の最下層部には、東西南北に釈迦にまつわるドラマを表現した塑像群が収められている。塑像とは、鑄造の原型となる粘土製の仏像である。北面の塑像群は涅槃場面を表現したもので、横たわる釈迦を囲み、嘆き悲しむ弟子たちがいる。

こちら向きに横たわる釈迦の枕元のすぐ後ろには、蛇（龍）を頭上に載せた像が正座をしている。釈迦を囲む群像の中で、最至近距離の位置である。これが、何を意味しているのか分からないが、画像は、国宝写真集や法隆寺の絵葉書などで見ることができる。

(7) 梵鐘の龍と天井の龍

梵鐘の龍

梵鐘が注目されるのは、大晦日の除夜の鐘くらいかもしれない。梵鐘は、かつては仏事の他に時を告げる「時の鐘」でもあった。宙吊りにされる鐘の頭頂部でフックの役割を果

たしているのが「龍頭りゅうず」である。左右の龍が重い釣鐘を支えている。

能楽の代表作『道成寺』は、梵鐘とその鐘の中で大蛇に変身する娘が主人公である。

「龍頭」といい、能楽『道成寺』といい、梵鐘は単なる青銅の塊ではなく、龍や大蛇の精霊を宿す存在だったのかもしれない。高谷重夫『雨乞習俗の研究』には、鐘を水に沈める他に、「鐘堀り」事例も複数紹介されている。鐘堀りとは、池等に沈めた鐘を龍頭が露出するまで掘り出すと雨が降るといふ信仰である。

天井の龍

龍の天井絵で有名な寺院は、京都をはじめ少なくない。天井に龍を描く理由は、水の守護神による火災除けであるとか、講堂に仏の教えが降り注ぐためであるとか諸説ある。

古民家を訪ねると、居間の囲炉裏から煙や蒸気を逃がすために天井がないことが多い。

「井」の本来の意味は、泉や川の取水地を指す。それを頭上に置いて「天井」と呼び、水や雨の守護神である龍を描いたことには、特別な意味があるはずである。



梵鐘の「龍頭」。江戸東京博物館の展示より。

(8) 日本最古の神社

奈良県桜井市三輪の大神神社おのみわは、日本最古の神社とされている。御神体は、神の鎮座する神奈備山みわやま、三輪山である。本殿は持たず、参拝者は拝殿越しに山に向かって参拝する。

御祭神は国造りの神、大物主大神おおもものぬしのおおかみである。

平安時代の『延喜式』神名帳に大和国一の宮「大神大物主神社」とあり、また重要な祈雨祭神の座と規定されていた。

三輪山とその山裾に広がる神社境内が一体化しており、不思議な立体空間を作っている。拝殿近くには神の化身の白蛇が棲むという御神木「巳の神杉」がある。手水舎の水は白蛇の口から流れ出ている。賽銭箱の前の供物棚には、参拝者が鶏卵を奉納している。

大神神社が御祭神の和魂を祀るのに対して、その荒魂を祀るのが、狭井神社である。狭井神社の葉井戸には、岩清水が湧出しており、御神水を持ち帰る参拝者が後を絶たない。

ところで、『日本書紀』は大物主神の別名を大国主神・大己貴命他とし、人間に変身する蛇としても描いている。そして、大己貴神をスサノオの息子としている。

『日本書紀』の神話によれば、スサノオを含めた関係は次のようになる。

「大物主・大国主・大己貴」
 = 「人間に変身する蛇」
 「大己貴=スサノオの息子」

よって、「スサノオ=人間に変身する蛇」。

ならば、「スサノオ」VS. 「八岐大蛇」の関係は「人間に変身する蛇」VS. 「大蛇」となる。

この「蛇」の部分「人間に変身する宇宙人、改造人間、魔法使い」に置き換えると、現代版の特殊能力をもった変身ヒーロー物語と同じ構図になる。また、同様にライセンス職業の弁護士、医師、教師を主人公とするテレビドラマとも重なる。彼らの対決相手は最強の同業者であり構造は同じだからである。前編の小括で触れた「野生の思考」、すなわち神話的思考の働かせ方において、今昔の差はないに等しい。

(9) 渓谷の水の神

丹生川上神社

奈良県吉野郡東吉野村の丹生川上神社は、瀧の音が聞こえる山間の渓谷に鎮座する。杉の巨木と溪流が交わる場所に奥宮があり、飛鳥・奈良時代に利用されたであろう吉野離宮跡地も境内にある。

丹生川上神社の御祭神は、罔象女神、水の一切を司る神である。

白川静『字通』によれば、「罔象」の読みは「もうしょう・まうしやう」。意味は、水中の怪。水中の怪を龍・罔象という、としている。つまり、罔象女神は、龍に匹敵する水の精霊であり、女神である。

丹生川上神社は、平安時代の『延喜式』臨時祭の規定により、重要な祈雨祭神の座とされ、京都の貴布禰神社とともに祈雨に黒毛馬、止雨に白毛馬を与えられた。生き馬を奉げる狩猟民的な野性味は、農耕以前に遡る歴史を感じさせる。

現在、拝殿には「黒馬・白馬」を描いた立派な絵馬が掲げられている。その額縁には、「東京電力、関西電力、昭和参拾八年拾月吉日」と記されている。当時、この国の電力は水力発電が主流だった。水不足を懸念しての奉納だったのだろうか。翌年は、東京オリンピック開催年であり、最後の「脚折の雨乞い」が行われた年である。



昭和38年10月、大手電力会社が寄贈した絵馬。

室生龍穴神社

奈良県宇陀市室生の室生龍穴神社は、東の県境寄りの溪谷に鎮座する。近隣には、高野山が女人禁制だった頃に女人参拝を許し、女高野と呼ばれた室生寺（真言宗室生寺派大本山）がある。

神社の御祭神は、雨を司る

高靄神（たかおかみのかみ）である。

白川静の『字通』によれば、

「靄」は、「靄」と「龍」を合わせた文字で、その読みは「レイ・リュウ」。

訓儀は、①竜、②おかみ、雨水の神。

「靄」は雨乞い儀礼を意味し、読みは「レイ」、「霊」の元になった文字だという。

神社拝殿には、神仏習合の姿を今に伝える「善女龍王社」の扁額が掲げてある。善女龍王といえば、弘法大師の雨乞いの霊験を象徴する存在である。東寺所蔵『弘法大師行状絵詞』には、京都の神泉苑で催された雨乞いに弘法大師が臨んだ折、池の小島に出現した大蛇の頭上に乗る金色の蛇が描かれている。小さい方の蛇が、善女龍王である。京都の神泉苑は現在も名所の一つとなっている。

神社本殿は春日造りで、朱塗りの御社が杉の巨木に囲まれている。

社殿の裏山を約1.5km登ると、「吉祥龍穴」と表示された奥宮がある。切り立つ溪谷の対壁には、注連縄が張られた岩の裂け目（龍穴）があり、川越しに参拝できる。神の名に相応しい神秘的で野性的な佇まいである。

貴船神社

京都府京都市左京区の貴船神社（貴布禰総本宮）は、京都市内北部の鞍馬山・貴船山の溪谷に鎮座する。御祭神は**高靄神**である。奥宮の神殿下には非公開の龍穴がある。龍穴を祀る点も室生龍穴神社と共通する。古くは大地の生気が立ち上る意味で氣生嶺とも呼ばれた。

丹生川上神社と同様に祈雨に黒馬を、止雨に青馬を奉納した由緒がある。これを絵馬で代替したことから絵馬発祥の地としている。参拝者が奉ずる絵馬は、干支に拘わらず、「黒馬・青馬」と「水神（龍）」の二種のみである。

貴船神社のホームページには、恒例祭である「雨乞の儀」に関連して、神社のFacebookに、かつて貴船山中の瀧で行われた雨乞いの概要が紹介されている。

「雨乞の滝は、一の滝・二の滝・三の滝と三段に分かれていて、酒三升をそれぞれの滝に一升ずつ流し、祈願者は鈴や鉦の音を鳴らし、太鼓を打ち鳴らしながら、『雨たもれ、雨たもれ！雲にかかれ、鳴神じゃ!!』と囃して川に入ってお互いに水を掛けあつた、といわれている。」

「瀧」自体が御神体のような内容である。また、『鳴神』といえば、同名の歌舞伎がある。帝に恨みを抱いた北山の高僧鳴神上人は龍神を瀧に封じ込め、雨を止めてしまう。これを宮中一の美女雲の絶間姫が籠絡して術を解く物語である。鍵は、瀧と注連縄が握る。

(10) 蛇の形

注連縄

注連縄は、聖域と俗世を分かち境界として神社の拝殿や鳥居等に架けられる縄である。

民俗学者の吉野裕子は、「注連縄は蛇信仰の顕現のひとつ」と述べている（『山の神』）。

吉野に触発された環境考古学者の安田喜憲は、古代中東・地中海から蛇信仰の事例を報告し、一神教の登場によって蛇は邪悪の象徴に転落したと述べている（『蛇と十字架』）。

次頁の写真は、東京都世田谷区の奥澤神社である。鳥居に大蛇が架けられ、拝殿の注連縄も蛇にみえる。オシャレな街と紹介される「自由が丘」の駅前から徒歩5分の場所にある。

例年9月に「大蛇お練り神事」が行われる。境内で藁から作られる大蛇を載せた神輿が町

内を練り歩く。世田谷区教育委員会の解説看板は、蛇は水の神と伝えている。



江戸後期に幕府が作成した『新編武蔵風土記稿』の荏原郡奥澤村の様子からは、水の苦勞を知る土地だったことが分かる。

『…水利不便ナル地ニテ用水ヲ僅二清水ノ流レヲ引用コレハヤヤモスレハ旱損アリト云…』

境内に御神木、神楽殿がある。摂社として石積みの祠に弁天様が祀られている。頭に何かを巻きつけた石の不動尊があり、飢饉と改革で知られる「享保」の年号が彫られている。

訪れた日は雨だったが、一人また一人と訪れる地元参拝者は、年配者に限らない。キラキラの東京に東京以前の文化が続いている。

縄文土器の蛇

長野県諏訪郡富士見町の井戸尻^{いんどじり}考古館には、「巴を戴く神子」と名付けられた縄文土偶がある。名前のとおり頭に蛇を載せている。また、「変形みづち文深鉢」と名付けられた土器もある。いずれも国の重要文化財である。ミズチは、オロチ等と同様に蛇の古名である。

富士見町と諏訪市に隣接する茅野市^{とがり}の尖石縄文考古館^{いし}には、「仮面のビーナス」、「縄文のビーナス」と名付けられた国宝の土偶が

ある。「仮面のビーナス」の仮面は、爬虫類の頭のような三角形をしており、「縄文のビーナス」が被った帽子を上から見ると渦巻き模様がある。また、「蛇体把手付深鉢」と名付けられた土器は、取っ手が蛇体である。

縄文遺跡の発掘地は、およそ泉や池、小河川といった水源の近くであり、ミズチのいた場所である。人類学者の大島直行によれば、

「関東甲信越地方の縄文中期の土器に蛇がたびたび描かれていることはよく知られたことだ」という（『月と蛇と縄文人』）。東京都練馬区の「石神井公園ふるさと文化館」の展示土器にも蛇が描かれている。

吉野裕子は、こうした縄文土偶や土器、その他多岐にわたる具体的な蛇信仰の顕現材料をあげ、「蛇は水の神以上の存在」、「私見によれば、蛇は絶対に祖霊であり、祖先神である」（『山の神』）と言い切る。そこまで言い切れるかは別として、少なくとも、蛇との只ならぬ関係は、相当古いことで間違いなさそうだ。

巴紋

巴紋^{ともえ}は、寺紋や神紋あるいは家紋に用いられている他に、太鼓の図案にも見られる。



「巴」に「爪」を付けると爬虫類の「爬」になる。『字通』によれば、巴の読みは「ハ」。訓儀は、①とって、器物のとって、②むし、蛇、大蛇、③うずまき、④類、⑤地名、⑥国語では、ともえ。また、象形文字としては、器の把手を表すとともに、象を食らうほどの大蛇を表しているという。

「巴」の文字の由来を辿ると、縄文土器の蛇体型の取っ手は、そのまま文字として古代中国で成立していたことがうかがえる。

なお、「トモエ」の語源は、弓を持つ手を穿る「鞆」とする説もある。埴輪の兵士も腕に太いオタマジャクシを巻き付けるように鞆を装着している。しかし、鞆紋とはいわない。

鱗紋と現存最古の日本地図

鱗紋も寺紋や神紋あるいは家紋に用いられている。



正三角形を3つ並べた鱗紋は、鎌倉幕府初代執権、北条時政以来の北条家家紋である。戦国時代の後期北条家の鱗紋は、二等辺三角形であり区別される。時政は北条政子の父であり、源頼朝の義父にあたる。頼朝早逝により幕府の事実上のオーナーは北条家だった。

家紋由来は、湘南江ノ島にある。時政が江ノ島の洞穴に籠って子孫繁栄を願ったところ、美しい天女が現れ繁栄を約束した。そして大蛇となって海中に没し、三枚の鱗を残した。これを吉祥としたのが由来とされている。

蒙古襲来時に鎌倉武士団が防衛の任に就いたことは周知のとおりである。北条家の菩提寺である称名寺（真言律宗別格本山）には、重要文化財『日本図一紙』がある。遠江・越後以東が欠損し西日本のみ地図だが、現存最古の日本地図である。称名寺は県立金沢文庫と隣接し、寺紋は鱗紋である。

地図の特徴は、蒙古襲来時の国名や激戦地の島が描かれた大俯瞰図であり、蛇が描かれていることである。『神奈川県文化財図鑑』における真鍋俊照の解説を引用する。

『図はその内部に大陸周辺諸国を配置しながら、日本列島を囲むように本体をくねらせた太い蛇を描く。蛇の背はうろこが入り全面に隈取りがほどこされている。日本全

体は明快な墨線で図形化され、列島の描写は島や国ごとに丸みを帯びている。』

鱗紋と衣装

江ノ島にある江島神社の神紋も鱗紋である。ただし、鱗紋の両側に白波が立つ。

東京・上野の不忍池辯天堂（天台宗東叡山寛永寺の諸堂）も白波の鱗紋である。不忍池辯天堂のモデルは琵琶湖の竹生島であり、御本尊も竹生島から勧請された。年に一度「巳成金大祭」の日に御開帳される。東京都三鷹市にある井之頭弁天堂も白波の鱗紋である。

神楽、能楽の衣装には、大蛇を連続した△模様で表現しているものがある。たとえば、
・島根県松江市の佐太神社の神楽『佐陀神能』（ユネスコ無形文化遺産）。

・能楽『道成寺』

梵鐘の中で娘が変身する大蛇。

・能楽『竹生島』

琵琶湖の守護神である龍神（大蛇）。なお、『竹生島』の演者の頭上には龍が載っている。



能楽『竹生島』の龍神（等身大人形）。

「佐倉新町おはやし館」の展示より。
江戸最大の祭り、山王祭の山車の上に飾られた。明治の頃に千葉県佐倉市の人々が買い受け、秋祭りや展示で活かしている。

江ノ島、白波、弁天様、竹生島といえば、「知らざあ、いって聞かせやしょう」の名科白で知られる歌舞伎『白浪五人男』の弁天小僧菊之助である。弁天小僧は、江ノ島岩本院（神仏習合時代の通称）の稚児として育てら

れた設定である。

五人勢揃いの場面では、雨でもないのに全員が傘を差し、弁天小僧は大蛇の描かれた衣装を着る。大蛇の名は、「琵琶蛇」。他の個性派四人の衣装に描かれるのは、雲竜、雷、鶏、大綱である。鶏を例外とすれば、まるで雨を待っているかのような出で立ちである。

(1) 琵琶湖の神々

白鬚神社の猿田彦命と白鬚明神

滋賀県の6分の1の面積を占める琵琶湖は、海の如く漫々と水を湛えた日本最大の淡水湖である。その西岸、高島市に白鬚神社はある。全国の白鬚神社の総本社である。湖面に鳥居があることから「近江の巖島」ともいわれる。御祭神は、^{さる た ひこのみこと}猿田彦命である。因みに、東京には白鬚という地名もある。浅草に近い隅田川に白鬚橋が架かり、東京スカイツリー側に白鬚神社がある。

記紀神話の猿田彦は、天津神のナビゲーターを果たす国津神である。ただ、『日本書紀』の描く風貌は大蛇である。鼻の長さ1m26cm、背の長さ2m30cm以上、全長11m20cm。「鼻の長さ」は、頭と考えなければ、頭のサイズはさらに大きくなる。眼は八咫鏡の如くてり輝き、^{あかみかぢ}赤酸醬（八岐大蛇の形容と同じ）に似ているとある。

伝承には遙か昔の祭神は比良山の神、比良明神であるとするものがある。謡曲『白鬚』は、湖が七度葦原になるのを見たという長命の比良明神が、一時は拒んだ仏教の布教を受け入れる物語である。実際に湖底には縄文時代の古墳群がある。

宝巖寺の大弁天と竹生島神社の女神

琵琶湖の北部に浮かぶ周囲2kmの竹生島は、弁天信仰発祥の地とされる。

竹生島宝巖寺（真言宗豊山派）の御本尊は千手観音と大弁天である。宝巖寺蔵の彫刻

「弁才天坐像」は八臂（多くの腕）に宝剣や宝珠等を持ち、頭には鳥居形の冠とともに人面蛇体の豊穰の神である^{うがふくじん}宇賀福神を載せている。まるで現代の万能多機能端末のようにハイスペックな印象の女神である。

竹生島神社は、『延喜式』神名帳に都久夫須麻神社と記されている。それは「(神を)^{いづ}齋く島」に由来し、「いつくしま」、「つくぶしま」に変じたともいわれている。

御祭神は、^{いち きしま ひめのみこと}市杵島比売命（弁財天）、宇賀福神、^{あざい ひめのみこと}浅井比売命（産土神。戦国大名の浅井氏以前からある女神。）、龍神（白蛇神。琵琶湖の守護神。）の四柱である。

例年6月10日には、相模の江島神社、安芸の巖島神社とともに日本三大弁才天である竹生島神社で、三社合同の祭事が行われる。

ちなみに、市杵島比売命は、九州の宗像三女神の名に通じ、巖島神社では市寸島比賣命、江島神社では、市杵島姫命と表記される。

4. 武蔵野三大湧水池

地下水に頼れなかった江戸城下では、湧水池からの上水を生活用水とし、また、湧水池の近隣では生活用水および田畑を潤す農業用水として利用した。

中でも井の頭池（三鷹市井の頭）、善福寺池（杉並区井草）、三宝池（練馬区石神井）は、武蔵野三大湧水池である。共通するのは弁天信仰を中心とした水神信仰である。三池とも弁天様（名はそれぞれ）が、池の小島に鎮座する点で、上野不忍の池と同じ構造をもち、琵琶湖や江ノ島のイメージが投影されている。

「井の頭」は、徳川家光が足を運び、最重要の泉として名付けた。命名時の文字が石碑となっている。池の古名は泊江である。ここに縄文古墳群があったことを東京都教育委員会の解説看板は伝えている。

井之頭辯財天では、頭に宇賀神を載せた御本尊の御開帳は12年に一度の巳年である。三

鷹市教育委員会の解説看板は、江戸城下の人々から厚い信仰を集めたことを伝えている。絵馬は干支に拘わりなく白蛇、御守の柄は鱗柄である。

三宝寺池には、巖島神社があり、御祭神は狭さ依より姫ひめ命のみこと（市杵嶋姫命の別名）である。摂社として水神社と穴弁天社がある。穴弁天社の宇賀神は年に一度、御開帳となる。

善福寺池には、市杵嶋神社がある。御祭神は市杵嶋姫命、小島に橋が架かるのは年に一度だけである。

三宝寺池、善福寺池では、かつて雨乞いが行われていたことを、杉並区教育委員会、練馬区教育委員会の看板解説が伝えている。



「井之頭辯財天」に奉納された石物の一部。
左：享保5（1720）年に日本橋から奉納された石灯籠。
右：明和4（1767）年に麹町から奉納された宇賀神。

5. まとめ

中国後漢時代の古典『論衡』は、西洋近代の「科学的思考」を先取りするように、数々の迷信批判をし、龍神や雷神の存在を完全否定している。また、前漢時代、「人間万事、塞翁が馬」等の教訓論で知られる『淮南子』も罔象しやうを幻としている。

大陸文化を旺盛に輸入した飛鳥・奈良時代の知識人達は、古代中国の哲学者の「科学的思考」に触れていても不思議はない。

一方で、同様に大陸由来の漢訳仏教聖典には、諸天、諸菩薩とともに八大竜王のことが当然のように書かれていた。また、日本列島には古くからの神々への信仰があった。

先人は、明治の文明開化の遙か昔から、新知識を取り入れながら、「科学的思考」と神話的思考を働かせる「野生の思考」を使い分けてきたのではないだろうか。

ひとつ、現代の「科学的思考」と「野生の思考」の使い分けの例をあげてみたい。それは、世界保健機構（WHO：World Health Organization）の旗である。最新科学の知見を用いて、人類の健康増進をはかる国連機関の旗には、真ん中にギリシャ神話の医学神に由来する杖と蛇が描かれている。

埼玉県鶴ヶ島市の「脚折雨乞」の次回開催は、2020年東京オリンピックの年である。近代オリンピックは、古代オリンピックを復活させたものであり、古代オリンピックの起源は神話的である。

【参考文献】

- ・鶴ヶ島市教育委員会『脚折の雨乞い』2001年
- ・朝日新聞縮刷版・読売新聞縮刷版1964年7～8月
- ・鶴ヶ島市ホームページ
- ・三豊市ホームページ
- ・JANOMEホームページ
- ・石上七輔『水の伝承』新公論社・1979年
- ・網野善彦他『いまは昔むかしは今第1巻 瓜と龍蛇』福音館書店、1989年
- ・中村元『ブツダのことは』岩波文庫・1984年
- ・『法隆寺昭和資料帳調査完成記念 国宝法隆寺』NHK・1994年
- ・高屋重夫『雨乞習俗の研究』法政大学出版・1982年
- ・谷川健一編『日本の神々第4巻大和』白水社・1985年
- ・同『日本の神々第5巻山城・近江』白水社・1986年
- ・同『日本の神々第11巻関東』白水社・1984年
- ・虎尾俊哉『延喜式 上』集英社・2000年
- ・中村啓信『新版 古事記』角川文庫・2009年
- ・小島憲之他『日本書紀（1）』新編日本古典文学全集 2・小学館・1994年
- ・真鍋俊照他『弘法大師行状絵詞下』続日本絵巻大成6・中央公論社・1983年
- ・貴布禰総本宮貴船神社ホームページ
- ・吉野裕子『蛇』講談社学術文庫・1999年（初出1979）
- ・同『山の神』講談社学術文庫・2008年（初出1989）
- ・安田喜憲『蛇と十字架』人文書院・1994年
- ・林述斎『新編武蔵風土記稿』歴史図書社・1969年
- ・大島直行『月と蛇と縄文人』寿郎社・2014年
- ・『神奈川県文化財図鑑』神奈川県教育庁・1989年
- ・蘆田伊人「新編相模国風土記稿」大日本地誌体系23・雄山閣・1970年
- ・片山迪夫『武蔵名勝図会』慶友社・1967年
- ・山田勝美『論衡（上）』新釈漢文大系第68巻・明治書院・1976年
- ・楠山春樹『淮南子（中）』新釈漢文大系第55巻・明治書院・1982年